

2006年5月

## 世界が尊敬した日本人⑪

### 全米軍をキリキリ舞いさせた伝説の名投手・沢村栄治

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)



「野球の世界一はどこか」―第1回のワールド・ベースボール・クラシック(WSC)が今年、3月に米国で開催され、日本は決勝戦でキューバを10対6で敗って、初代世界チャンピオンに輝いた。

大リーグのオールスター選手が初めて出場する世界大会だけに、戦前、米国の優勝は間違いないとみられていたが、米国は早々に敗れて各国の力の差が縮まっていることが証明された。

ベースボールが誕生して約120年目にして、日本が初めてその頂点に立ったわけだけだが、日米野球決戦の中で、改めて70年前の伝説の剛速球投手・沢村栄治がクローズアップされている。

1934年(昭和9)11月、「野球の神様」ベーブ・ルースが監督兼選手として、全米オールスターメンバーを率いて来日した。全日本と16戦を戦い、ベースボールの面白、楽しさを伝えた。

各地で熱狂的な歓迎を受け、ルースは感激して日本好きになった。この日米野球交流史の輝かしい1頁によって、日本に「野球」が普及し、昭和11年にプロ野球・巨人軍が生まれるきっかけとなった。

全米軍は大リーグ黄金期の超豪華メンバーで、3番がホームラン王・ベーブ・ルース、4番は「打撃王」とうたわれ、この年49本の本塁打王にも輝いたルー・ゲーリック。5番のフォックスも44本の本塁打を打っており、2番ゲリンジャーを含めてその後、いずれも米野球殿堂入りを果たしたという強打者ぞろいのアメリカ最強チームだった。

全日本は16戦して全敗。それも2桁以上の大差で敗れた試合が多く、今回のイチロー選手の韓国に対しての「むこう30年は勝てないように」という言葉以上に、大人と子供以上のような圧倒的な実力差があった。

そのうち、1試合だけは日本が勝つかという伝説の試合があった。

昭和9年(1934)11月20日、静岡・草薙球場での第10戦。全日本の投手は弱冠18歳の沢村栄治。高校球界ナンバーワンの投手で、京都商業を中退しての参加だった。



松坂大輔ばりの150キロの速球派で、これに3段で大きく割れる落差のあるカーブが武器。

その投球ホームは足を高く上げてスパイクの裏がバッターに見えるくらいで、野茂がくりりと背中を見せるのと似た特徴があった。

試合は沢村の快速球とカーブがびしびしきまり、強打者をギリギリ舞いさせた。

2回は一番マクネアを左飛、2番ゲリンジャー、3番ルース、4番のゲーリック、5番フォックスの4人を連続三振に打ち取った。

6回までゼロ行進の息づまる投手戦が続き、全米軍も次第にあせってきた。

「スクール・ボーイ」沢村の快投を凝視していたルースはカーブを投げる時の、口をゆがめるくせを見抜きゲーリックに告げた。7回裏、ルースはそのカーブを狙って投ゴロに倒れたが、ゲーリックは本塁打を叩き込んだ。

惜しくも、この1点で日本はやぶれた。沢村は8回まで投げて9三振、ヒット5本に抑えた。詰め掛けた2万人の観衆は、今回のWBCでの松坂、上原投手らの熱投と同じくらいの大声援を送った。

試合の後、マック総監督は「沢村をアメリカに連れて行きたい」ともらした。翌日の読売は沢村を「正に大リーグ級、日本一の快投」と絶賛し、「近いうちに日本に職業野球団ができて、沢村は加入すると予想されるが、それ以前に米大リーグに買われなかつたら危惧する」と書いた。これが実現していれば、沢村はメジャーで70年前に日本人ピッチャーとして大活躍をしたことだろう。

この全米軍にスパイがいたとして戦後、話題となった。謎の男・モー・パークで、捕手兼通訳として来日し、試合には全く出場しなかったが、いつもどこかに出かけていた。ある日、聖路加病院屋上から映画用の大きなカメラで東京市内を撮影していた。

昭和17年4月のドウリットル隊の東京初空襲のときには、このフィルムが爆撃の参考にされたという。

また、バーブ・ルースもこの日米野球で監督になる腕をためされたが、ゲーリックと仲たがいで、翌年ヤンキースを去り、監督にもなれず現役を引退した。米ベースボール史でも日米野球はエポックとなった。

沢村は昭和11年(1936)に巨人に入団して大活躍。5年間の通算成績が63勝22敗、防御率1.74、ノーヒット3回の記録を残したが、何度も戦場に応召され、同19年12月、フィリピン戦場に向かう輸送船に乗っていて米潜水艦の魚雷攻撃で27歳で戦死した。

**<禁転載>**